

「(見えない目撃者)がきっかけで。」

それにしても、コロナ感染者の人数が減らない。

東京もそうだけど、世界規模でも毎日増加している。これは本当に深刻な問題。

5月は色々な事を我慢して耐え忍んで、日本の感染者数は減少傾向にあったので、「6月からは元の生活に戻る」となんとなく思っていたのに……。今でも外出する時は必ずマスク着用。「いつでもどこでもマスク着用!というのが感染予防だという事に世の中はなっている。」

「マスクの効果があるのかどうなのか?」という議論は、今は横においておいて、現状では無用なトラブルを避けるためにも、「感染予防」をちゃんと行っているという意思表示のためにも、外出時にはキチンとマスクを着けるよう心掛けております。

それにしても、こんな状況が続く中の演劇公演を再開するというのは至難の業。

「新しい形」かあ。

出演者同士が接近したらダメ・・・至近距離で向き合うのもダメ・・・大声出すのもダメ・・・これは困ったねえ・・・でも「芝居」を続けるためにはしょうがない。「新しい形」を模索しつつ、なんとか踏ん張ります。

そんなある日、某映画制作関係者から1通のメールが来た。(所属団体名を明かしていいか確認しなかったので、あえてこういう表記とします。)要約すると、とある映画制作の企画をしていて、主人公の女性が「目が見えない人」という設定なのだが、制作当事者の皆さんは、視覚に障害のある人とキチンと接した経験がないので、どういった「描き方」をしたらいいのか?相談に乗って欲しいとの事。

そこで先日、監督兼脚本を担当する青年と主演の青年、そして助監督の青年という3名の若者とお会いした。

私よりもはるかに若い青年達だったのだが、「このご時世に負けないで!」いい映画を創りたい!という情熱は素晴らしく、とっても刺激を受けた。

彼らは、タブレットに入れているものすごい数の質問事項を見ながら、真剣に私に質問をしてくる。

だから私も、目が見えないメンバーと共に活動してきた様々な経験談等を熱意を持って話をする、彼らは目を輝かせながら、一生懸命私の話を聞いてくれた。

当初、1時間くらいで終わるかな?と思っていたのだが、なんとまあコーヒー2杯で約2時間半も!ソーシャルディスタンスを確保した「ひろい空間」で話し込んでしまった。

「ところで、どうやって劇団ふあんハウスの事を知ったの?」と監督の青年に聴くと、映画「見えない目撃者」を観に行つて、吉岡里帆さんが本当に目の見えない人に見えたので、「このすごい演技はどうやって行ったのだろう?」と映画が終わわり、最後のエンドロールを注視していたら、

「視覚障害取材協力・・・劇団ふあんハウス」と大きく出てきたのでそこで劇団ふあんハウスを検索し、ホームページにある「見えない人を演じる!」という項目をご覧になりこの度連絡をしてくれたのだそう。

いやはや・・・あれは吉岡さんの素晴らしい演技があればこそで、我々は、そんな大した事は出来なかったって反省しきりだったのに、こうして観てくれている人は観てくれているんだなあーって、ちよっぴり感動。

素晴らしい芝居をされた吉岡里帆さんと、約半年にも渡る我々との打ち合わせも経て、映画を完成させたプロデューサーの小出さんの情熱に感謝、感謝である。

小出さん、吉岡里帆さんが創ってくれた若き映画人との「ご縁」を大切に、全力で彼らの映画創りのお手伝いもさせてもらうつもりである。

(主に視覚に障害のある女性を演じる女優さんへの演技指導)

コロナに負けないで頑張ろう!って、彼らの熱意に触れて、あらためて思うのであります。